

琉球大学学術リポジトリ

シテアルとスルーシテイルとの関係について

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学留学生センター 公開日: 2008-07-03 キーワード (Ja): 対象指向性, 結果性, 継続性, 変化の結果の継続, ペルフェクト キーワード (En): object oriented, resultative, continuative, resultativity of change, perfect 作成者: 副島, 健作, Soejima, Kensaku メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/6567

シテアルとスルーシテイルとの関係について

副島健作

要 旨

本稿では、シテアルは〔+継続性, +結果性, +対象指向性〕という性質をもち、シテイルは〔+継続性, +結果性, -対象指向性〕という性質をもつことを主張する。具体的には、以下の2点を明らかにし、シテアルは客体結果相と規定できることを指摘する。

- (1) シテアルの〔+継続性, +結果性, +対象指向性〕という一般的意味は個々の文脈において《変化の結果の継続》, 《ペルフェクト》の意味へと具体化する。後者は、行為に関心を集めるある限定された条件：(i)動作主顕在化, (ii)動き時点明示, (iii)動き量規定, 等の下で働くことから派生的意味であり、前者は基本的意味である。
- (2) 《ペルフェクト》を表すシテアルは、シテイルと異なり、意志・勧誘形、命令形、願望態等のいわゆる「主観的表現」や受身形、授受表現と共起できない。ここから《対象指向性》はシテアルのあらゆる個別的意味に潜在的に備わっているといえる。

キーワード：対象指向性, 結果性, 継続性, 変化の結果の継続, ペルフェクト

0. 序

現代日本語の動詞の形態論的カテゴリーとしてのアスペクト形式として認められているものには、スルーシテイル（シターシテイタ。以下、スル、シテイルはそれぞれ「する」及び「した」、「している」及び「していた」で代表される動詞の形式を包含する表現として用いる）等があるとされる。同様に、これまでに数多くの研究者がシテアル（シテアッタ。以下、シテアルは「してある」及び「してあった」で代表される動詞の形式を包含する表現として用いる）の形式をもアスペクトに関連づけて考察してきた。確かに、シテアルは、行為の結果としてもたらされる状態を表す表現であり、シテイル同様、動作（以下、「動作」は「動き」と「変化」とを含んだ上位概念、いわば event の意で用いる）の実現後の局面をさしだす《結果性》をもち、動詞の表

す動作の何らかの流れの姿を表すという点でアスペクト形式であるといえる。

しかし、シテアルはシテイルとは次のような点で大きく異なる。つまり、

(i) 窓が開けてある。

の文に対立するスルの形式の文は、

(ii) 誰かが窓を開ける。

であって、決して「*窓が開ける」ではない⁽¹⁾。上の例では、シテアルの形式をとる構文は、動作の対象がガ格をとり、動作主体は明示されない。このように、シテイルとは異なり、動詞のシテアルの形式は文の統語構造にまで影響を及ぼす形式なのである。

このようにシテイルや直接対象の受け身文と似たところが多いシテアルの位置づけは、現代日本語の動詞の文法カテゴリーを考える上でも、より効果的な文法教育を考える上でも、1つの重要なポイントであるといえる。そこで、本稿では、シテアルが表す意味を、シテイル及びスルと比較しながら、詳しく検討してみようと思う。

1. 前提的議論

本稿は、渡辺 (1969)、益岡 (1987) 等の、シテアルをシテイルとともにスルに対立するアスペクト形式とみなす、すなわちスルーシテイルとシテアルは形態論的カテゴリーとしてのアスペクトの体系内でパラディグマティックな関係にある、とする立場にたつが、その他にもシテアルに関する研究は多々ある。その中で、一貫して強調されてきたことは、まず、i) 統語的観点から2つの類型が区別できる、それから、ii) この分類が意味的特徴とも密接に関りあっている、の2点である。

I. NP (Patient=対象, 以下P) -ガ V-テ アル ⇒ 結果の状態

(1) きょうは一椀のめしと和えもの、干魚がちまちまとそなえてある (歳月)

II. NP (Agent=動作主, 以下A) -ガ NP (P) -ヲ V-テ アル ⇒ 経験・完了

(2) 僕は飛行機の予約をしてあるのだ (ダン)

例えば、スルの文ではヲ格をとるはずの意味役割上の対象 (P) (上の例でいえば「一椀のめしと和えもの、干魚」や「飛行機の予約」) が、対立するシテアルの文ではガ格をとるものととらないものとに2分される。Iは対象がガ格で示されていることにも現れているように、言語主体 (話し手及び聞き手) の関心が対象にあり、対象に起こった「変化の結果の状態」を表している「受動型」である。一方、対象がヲ格のままであるIIは、言語主体の関心は動作主にあり、対象に起こった変化の結果の状態

というよりもむしろ動作主が起こした「動きの基準時点での関連性（完了、有効性等）」を表している「能動型」である。益岡（1987）はこのように言語主体の関心の度合いを2つに対極化させ、言語主体の関心が対象にある文を「対象指向性」、行為にある文を「行為指向性」と特徴づけ、前者は受動型の構文に典型的に見られ、後者は能動型の構文に典型的に見られる特性であることを指摘した。

こうした、シテアルの2つの用法には構文的な違いがあるとする論は、基本的に正しく、支持したいところである。ところが、この形式が具体的に他のアスペクト形式とどのように異なるかということになると、不明な点も見られる。例えば、例(2)は「僕は（もう）飛行機の予約をしているのだ」のように、ペルフェクト（Perfect）の意味を表すシテイルに置き換えることができるが、その違いについての言及は、筆者の知る範囲では見つけることができなかった。このような点に鑑み、本稿ではスルーシテイルとの体系内における機能単位間の対立からシテアルを一般化、体系化することを試みる。

つまり、益岡（1987）では「対象指向性」はシテアルの2つの用法を区分する要素として用いられたのであるが、本稿ではこれをシテアルとシテイルの一般的意味を弁別する要素と考え、シテアルのあらゆる個別的意味に潜在的に備わっているということを主張し、さらに、その一般的意味がどのように具体化されるかを述べようと思う。なお、本稿では、「結果の状態」は《変化の結果の継続 Resultative (Nedjalkov (ed.) 1988)》であり、「経験・完了」は《ペルフェクト Perfect (Маслов 1984)》であると考え。《ペルフェクト》とは、工藤（1995）がシテイルにたいして用いた〈ある設定された時点においてそれよりも前に実現した運動が引き続き効力をもっていること〉（工藤1995：99）である「パーフェクト」という概念とほぼ同義で、シテアルに対しても「結果の蓄積」や「有効性の持続」という特徴づけで認められてきたが、これをより詳しく考察する。

2. 一般的意味

本稿では、シテアルはその意味の総体、一般的意味として〔+継続性、+結果性、+対象指向性〕という性質をもち、シテイルは〔+継続性、+結果性、-対象指向性〕という性質をもつことを主張したいと思う。従来、シテイルはスルとの対立という観点から、《継続性》（奥田（1978）、高橋（1985）、工藤（1995））や《結果性》（寺村（1984）、城田（1998））を表すとされてきた。同様の意味がシテアルにあり、相補

的であることも、渡辺 (1969)、益岡 (1987, 2000) 等によって指摘されている。

《継続性》, 《結果性》ということでは共通した特徴をもつ両形であるが、「主体の状態はテイル形が、客体の状態はテアル形が、それぞれ表す」と益岡 (1987: 203) は述べ、ここでは《対象指向性》ということばは使われていないが、シテアルが客体中心の表現であるのに対し、シテイルはそうではなく、主体中心であることを示唆している。

「対象指向性」とは、既に述べたように、益岡 (1987) でシテアルの2つの用法を区分する要素として用いられたものであるが、本稿では、シテアルとシテイルの一般的意味を弁別する要素と考え、シテアルのあらゆる個別の意味に潜在的に備わっているということを主張する。

このようなシテアルと他の形式との差異を際立たせる不変的な要素としての《対象指向性》を<視点を動作主ではなく、対象に置くこと>を示す意味上の要素と定めておく。そして、受け身文のように対象を主語へ昇格させ、構文まで変えてしまう機能を強い《対象指向性》とみなし、構文への影響はないが、言語主体の視点が主体にならない機能を弱い《対象指向性》とみなす。視点が主体にないということは、言語主体の自己制御可能性を欠いているということであるが、これは無意志動詞を述語とする文のように言語主体の加工や判断作用を文上に加えられない、ということの意味する。いふならば意志動詞の表す動作を無意志的なものとしてさしだすわけである。

3. 基本的意味と派生的意味

一般的意味が実際の文上でどのように具体化されるかを述べるにあたり、従来のアスペクト論同様、基本的意味と派生的意味という考え方を導入する。

本稿ではコンテキストへの依存性が強く、特定の条件、ある程度はつきりと定められる (限定された) 条件の下で働くものを派生的意味と位置付け、対して、条件の限定の少ない、あるいは無いものを基本的意味と位置付ける。

シテアルについて言えば、基本的意味として《変化の結果の継続》を表し、《ペルフェクト》は派生的意味である。以下にその根拠を示す。

(3) a. ??見張りをなぐってある。

b. 太郎は / 数分前に / 1度 見張りをなぐってある。

このように、主体動き客体不変化動詞の場合、(3a) のように最小のコンテキストでは少々不自然に感じられるが、(3b) では、動作主、時間の状況語、動きの量等の

語句の影響で《ペルフェクト》と解釈され、許容可能となる。(3a) を無理に許容しようとする、何らかの特定の場面を想定しなければならないが、こうした頭の中で行う制限も「条件の限定」の一種である。こうして、《ペルフェクト》は派生的意味と位置付けられる。

この点を明らかにするために、さらに若干の例をあげてみよう。次は、主体動き客体変化動詞の例を考えてみる。

- (4) a. テーブルの上に花を飾ってある。
 b. 私はテーブルの上に花を飾ってある。
 c. すでにテーブルの上に花を飾ってある。

これらの例が示している点は、(4b) や (4c) のように動作主や動きの時間が明示される条件の下では《ペルフェクト》として機能するが、(4a) のように条件の限定がないと、《変化の結果の継続》として機能する、ということである。

なお、《ペルフェクト》では語彙的制限が緩くなるが、これは「条件の限定」とは無関係だと考える。これは、シテイルの場合と同様である⁽²⁾。

もう一言付言しておく、前述した「受動型」(NP (P) -ガ V-テ アル) と「能動型」(NP (P) -ヲ V-テ アル) の2類型と基本的意味、派生的意味とは直接関係がないと考える。「3日前にテーブルとイスがならべてある」は構文上は「受動型」であるが、《ペルフェクト》を表しているし、「テーブルとイスをならべてある」は構文上は「能動型」であるが、《変化の結果の継続》とも解釈され得る。基本的意味と派生的意味との違いはこれら「受動型」、「能動型」といった構文上の違いから来るのではなく、コンテキストやその他の特定の条件による。

4. 変化の結果の継続

まず、《変化の結果の継続》の例を挙げる。

- (5) テーブルの上には、彼女の腕時計と眼鏡が置いてあった。(ダン)
 (6) なるほど、入口に近い軒下に、スコップが一つと、取手のついた石油罐が二つ、べつに並べてある。(砂女)

(5), (6)では、客体である「彼女の腕時計と眼鏡」や「スコップ」、「石油罐」が、誰かが置いたり並べたりした結果生じた状態のままであることを表している。シテイルと異なる構文的特徴としてあげられるのが、直接対象の受け身文との類似性である。

- (7) 太郎が窓を開ける。(参加者2) → 窓が開けてある。(参加者1)

このシテアル構文の大きな特徴は、スルの形式を述語にする文に対して参加者を1減させることにある。ガ格参加者を形式上追放し、残った参加者を主語の地位へ昇格させることにより、言語主体は「太郎が窓を開けた、その結果の状態」を「窓」の側に立って表現している。これは文の意味上、視点（事態を眺める側）が客体にあることの反映であり、統語にまで影響を及ぼすほど強い《対象志向性》の存在が確認できる。

5. ペルフェクト

5-1 構文的特徴

前述例(2)のようなシテアルの用法は、「先行して起こった行為が基準時に効力を持ち続けている」ので《ペルフェクト》といえる。これには、＜動詞の表す2平面のうち、先行する動作に関心がある＞環境が必要である。

(1) 動作主の顕在化

これまでの研究で、「NP (A) -ガ NP (P) -ヲ V-テ アル」の構文がこの《ペルフェクト》を表すとされてきた。動作主の顕在化によって、言語主体の関心が動作に置かれるようになるのであろう。

(8) 私はあなたからの手紙を全部、自分の机の一番下の抽斗にしまっていました。
(錦繡)

(9) 「藩士」としての体裁だけはととのえるために桂は伊藤を自分の手付ということにしてあった。
(歲月)

(10) 自分は、美術学校にはいりたかったのですが、父は、前から自分を高等学校にいて、末は官吏にするつもりで、自分にもそれを言い渡してあったので、口答え一つ出来ないたちの自分は、ぼんやりそれに従ったのでした。
(人失)

(11) 谷口がレンタカーを借りて、近くに停めてあるのだ。
(女社)⁽³⁾

(2) 動きの時点を示す

もっと明確な場合、具体的に構文上の形式として現われる条件としては、「既ニ、モウ、トックニ」、「トキニ、マエニ、マデニ、アイダニ、ウチニ、～時間デ」など、あるいは、現在テンス（基準時＝発話時）の場合は「キノウ、サッキ、ムカシ」等、動作を直接とらえ、基準時より前に位置付けて示す状況語と結びつくという、条件づけがあげられる。

(12) 国務省高官は六日「日本政府とは常に連絡を取り合っている」と述べ、先月下

旬にハワイで開かれた日米韓の高官協議などを通じ、日本側に既に見直し内容の概要を伝えてあることを明らかにした。 (佐賀)

(13) 無洗米は、精米するときにコメ粒の表面のヌカを取り除いてあるため、洗わなくてよいという。 (佐賀)

(14) 二次会はアルルを使うことにしてすでに予約を入れてありましたので、私は車を止めさせて、道端の公衆電話で、きょうは予定が変わって行けなくなった由をアルルに伝えました。 (錦織)

(15) 「しまった！」と思わず声を上げたのは、昨日の夕食と一緒に、と一昨日、谷口と約束してあったのだ。 (女社)

(3) 動きの量を規定

この他、《ペルフェクト》の用法は「頻度の副詞」や「動きの全体量を規定する」ような表現との共起により実現する (森田1971: 184)。やはり先行する動作に関心があるためである。

(16) 2, 3度小説を書いてある。

(17) あの部屋の散らかり様は、夜中ずっとお酒を飲んであったのだろう。
またこの場合、動きを表す自動詞でもシテアルを用いることが可能となる。

(18) a. いやというほど眠ってあるから、二、三日徹夜しても大丈夫だ。

b. 大事な試合を控えているので、じゅうぶん休養してある。

c. 二三次泳いであれば、心臓麻痺の心配はなかりう。

(森田1977)

以上のような条件の他、状況、文脈に飾られることによって、動作主や動きの時点、動きの量が明らかであれば、具体的に構文の条件がなくても《ペルフェクト》と解釈され得る。(12)や(14)で「すでに」という状況語を省いても《ペルフェクト》と解釈されるのはそのためである。(12)では動作主が「国務省高官」であり、(14)では語り手である「私」であることは、構文上明記されていなくても、文脈から明らかである。

以上、動作と結果という2平面をとらえる《結果性》では、原則、言語主体の関心は後続結果にあるが、ある状況下では先行動作に関心を持ち、《ペルフェクト》の意となるということを述べた。

5-2 動詞に関する制限

シテアルで《ペルフェクト》を表す動詞には、シテイル形式とは異なる制約がある。

シテイルでは「語彙的制限がない」(工藤1995:120)が、シテアルは意図的行為を表す動詞に限られるのである(高橋1969:128)。《変化の結果の継続》が主体動き客体変化動詞に限られるのに比べ、制限がゆるい⁽⁴⁾と言える。

5-3 シテイルとの関係

次に、《ペルフェクト》におけるシテイルとの違いを挙げ、弱い《対象指向性》がシテアルの文法的な振る舞いを制限していることを指摘する。

(1) 主観表現との共起

シテアルは、言語主体の意志行為的態度の表現で、意志動詞からつくられる意志・勧誘形(シヨウ)、命令形(シロ)、願望態(シタイ)等のいわゆる「主観的表現」と共起できない。

- (19) ゼミに出る前に、しっかりテキストを読んでいよう／*読んであろう。
- (20) 論文を書くため、締切1ヶ月前までに沢山資料を集めていろ／*集めてあれ。
- (21) 来年の今頃は、博士課程を修了していたい／*修了してありたいね。
- (22) 武は就職を考えると、多言語を習得していたかった／*習得してありたかった。

(19)や(20)は「あの学生達なら、しっかりテキストを読んであろう。」や「資料よ、(頼むから) 集めてあれ!」が仮に可能でも、意味はそれぞれ推量や願望となる。これは、主語が3人称で、自己制御不可能な動詞のシヨウやシロの場合(例えば、「明日は彼女も来よう。」や「ヤンキーくたばれ!」)と同様である。シテアルには、言語主体の自己制御可能性が欠けており、意志動詞の表す動作を無意志的なものとしてさしだす機能があるといえる⁽⁵⁾。このように、視点を動作主から他(すなわち対象)へ移す機能は弱い《対象指向性》の影響によると考えられる。

(2) 受け身の表現との共起

動詞がシテイル、シテアルの形をとって、さらに受け身の表現(サレル)と共起できるかできないかでも、振る舞い方がことなる。

- (23) 僕が話す前にこの事を打ち明けていられては／*打ち明けてあられては、困るんだよ。
- (24) 書評であんなによくほめていられると／*ほめてあられると、うれしい限りだ。

三上(1953)は動詞を受け身の形を持つ能動詞と受け身の形を持たない所動詞とに分類したが、それに従えばシテイルは能動詞的であり、シテアルは所動詞的である。両者の違いは意味上意図的であるか、非意図的であるかに還元されるので、シテアル

は意志動詞を無意志的なものにする, ということになる。

(3) 授受表現との共起

言語主体と語られる事象の参加者とが関りあうカテゴリーである授受表現 (シテアゲル・シテクレル・シテモラウ等) もシテアルとは共起できない。

(25) 昨日花子が帰宅するまでに, 太郎は彼女にカレーを作っていてあげた。/*作ってあってあげた。

(26) 換気のため授業の前に窓を開けていてもらった/*開けてあってもらったんだ。

(27) 明日のパーティでは娘を女優ということにしていてくれる/*してあってくれる?

授受表現は言語主体や語られる事象の参加者の間で行われる恩恵的行為のやりもらいを表現するもので, 意志動詞から作られる。シテアルが共起できないのは, やはり視点が主体にはなく, 無意志的なものとしてさしだされるからであろう。授受表現は同じ事柄を話し手, 聞き手, 第3者と語られる事柄の参加者である与え手, 受け手とを関連づけつつ, 違った視点から表現するものであるが, こうした視点の移動がシテアルでは制限されるわけである。

以上のように《ペルフェクト》の用法においては, シテイルでは主観的表現や受け身形, 授受表現が可能であり, シテアルでは不可能である。この共起関係を見る限り, シテアルの文には意志動詞の表す動作を無意志的なものとしてさしだす機能があると思われる。つまり, シテアルは視点を動作主以外の意志の無いところに置いて現実世界を表現するのである。ここに弱い《対象指向性》の存在が確認できる。

以上, 同じ《ペルフェクト》でも, 動詞の表す動作を客観的にさしだす場合はシテアル, 客観性を特には強調したくない場合はシテイルを用い, 相補的であることを指摘した。

(4) 自動詞のシテアル

ここではシテアルの《対象志向性》によって自動詞のシテアルが可能な理由の説明を試みる。

動きを表す自動詞においても, 特定の条件の下で《ペルフェクト》用法が可能であることは述べた。実際, これらの動詞 (およびそれらに関わる修飾表現) の表す動作は意味上は再帰的であり, 自分自身に効力を及ぼす動きに限られる。例(18)は次のように置き換え可能である。

- (28) a. いやというほど自分自身を眠らせてあるから、二、三日徹夜しても大丈夫だ。
- b. 大事な試合を控えているので、じゅうぶん自分自身を休養させてある。
- c. 二三回自分自身を泳がせてあれば、心臓麻痺の心配はなかろう。

ここでは、「いやというほど眠る」という動作は「自分自身をいやというほど眠らす」という動作と同義であり、同様に「じゅうぶん休養する」は「自分自身をじゅうぶん休養させる」、「二三回泳ぐ」は「自分自身を二三回泳がせる」行為と同義であるにとらえることができる。つまり、この種の自動詞の主語は動作を意図的にコントロールする動作主であると同時に、結果や効力が生じる対象でもある。このように、主語が動作主=対象である自動詞でなければ、シテアルの形はとれないことから、シテアルには《対象指向性》があることがわかる。逆に言えば、シテアルの《対象指向性》により、自動詞の主語を動作主ではなく対象として意識させ、表現可能となっているとも言える。状況語を含めた自動詞を「自分自身をサセル」という使役表現で言えるかどうかで、シテアルによる《ペルフェクト》が可能か、調べられる⁽⁶⁾。

一方、シテイルには《対象指向性》が欠けているので、以下の例を動作主=対象としてとらえるのは比較的難しいといえる。

- (29) a. いやというほど眠っている (??自分自身を眠らせている) から、二、三日徹夜しても大丈夫だ。
- b. 大事な試合を控えているので、じゅうぶん休養している (??自分自身を休養させている)。
- c. 二三回泳いでいれば (??自分自身を泳がせていれば)、心臓麻痺の心配はなかろう。

6. 結

本稿では、現代日本語動詞のシテアルの形式の意味のありかたをめぐって考察を行い、具体的には、シテアルが個別的意味を実現する際の諸条件を明らかにし、シテイルに対して、より対象指向的な特性を持つことを指摘した。この形式は基本的に限界性他動詞（主体動き客体変化動詞）において客体に視点を置いた《変化の結果の継続》を表し、特定の条件下で先行動作に関心が置かれると、視点を主体の側に置かないで、《ペルフェクト》を表すが、いずれも、以下の一般的意味を共通特徴としていくことが解った。

(30) シテアルの一般的意味

シテアルは動詞（およびその補語とそれらに関わる修飾表現）の表す動作の結果を状態（継続の途中にある姿）としてとらえ、動作を受ける側である客体に視点を置いて傍観的に描写する。

意味上の要素それぞれの存在を+, 不在を-で表すと, 以下のようになる。

表1. アスペクト形式の持つ意味上の要素

	ス ル	シテイル	シテアル
継続性	-	+	+
結果性	(-)	+	+
対象指向性	(-)	-	+

() は実際上機能を発揮していない要素を示す。

継続性を持たないものを動的相, 持つものを静的相⁽⁷⁾, 結果性を持つものを結果相, 対象指向性を持たないものを主体相, 持つものを客体相と呼ぶと, 日本語のアスペクト形式は図1のように分類される。こうして, シテアルは客体結果相の表現であると規定できる。

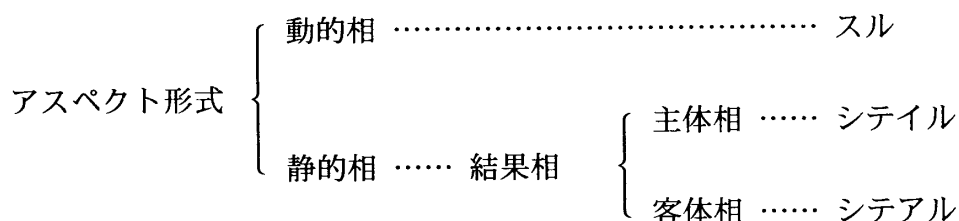


図1. アスペクト形式の意味上の分類

こうした, 体系内における機能単位間の対立から抽出される, 形式に固有の《不変性》が, 特定の個々の文脈の中において現れる多様な《変異性》へと意味を構築する過程を記述することは, 言語のしくみがいったいどうなっているのかを理解するうえで重要であるばかりでなく, 日本語学習者にとって困難なアスペクトにまつわる意味用法を分かり易く教示するのに, 幾許かの示唆を与えることにもなると思われる。

本稿で残した問題点として最大のものは, シテアルに意図性が含意される現象をどうとらえるか, ということである。これについては以下のように考えている。シテアルが変化してしまった客体に視点を置く表現である以上, 文には主体が常に意識され

る。文上の存否に関わらず、現実世界において客体は主体なくしてはあり得ないからである。通常、客体に変化を及ぼすのが主体の意図的なはたらきかけであることは、言うまでもない。こうして、主体の意図性は含意されるのではないだろうか。この点は、意図性の表現とされるシテオクとの連関を明らかにすることでより詳細に解明されるのではないかと考えているが、今後詳しく検討していきたいと思う。

註

(1) 本稿では、議論を平明にするために、動詞の自他の違いは語彙論上の問題とみなす立場をとる。したがって、スルーシテイルーシテアルの対立の中では、「開けている」は「開けるー開けているー開けてある」の体系の1部であり、「開くー開いているーφ」の体系の1部をなす「開いている」とは対立関係にないと考える。

(2) 例えば、以下の例を参照。

- (ア) a. 見張りをなぐっている。
b. 数分前に見張りをなぐっている。
- (イ) a. 窓が開いている。
b. すでに窓が開いている。

シテイルの場合、上の(ア)と(イ)の例の a が示すように、基本的意味として、動きを表す動詞は《動きの継続》、変化を表す動詞は《変化の結果の継続》を表すという動詞の語彙的制限があるが、b が示すように、派生的意味としての《ペルフェクト》には動詞の語彙的制限はない。それでも、ある程度の限定された条件で機能するので派生的意味と考えられる。(工藤 1995)

(3) この例は査読者から「谷口がレンタカーを借りて、(それが) 近くに停めてあるのだ。」のように《変化の結果の継続》としての解釈も可能だという指摘を受けた。文脈のないところでは、前件(従属節)の主語が後件(主節)にかかるかどうかの判断に揺れが見られ、後件まではかからないという判断の場合、シテアルを述語にする節に動作主が顕在化しているとは言えなくなるからではないかと考えられる。

(4) 一般的にPerfectはResultativeとは異なり、どんな動詞からでも派生されると考えられている。(Nedjalkov (ed.) 1988)

(5) これらの例では、「ゼミに出る」ため、「論文を書くため」、人生の幸福のため、「就職」のため、といった文脈上の目的意識がはっきりしているにも関わらず、シテアルは不可能である。このことは、シテアルそのものに意図性、準備性があるとす

る定説の反例ともなり得ようが、詳しい検証は他日に期したいと思う。

- (6) 形態上ヲ格をとり、他動詞とみなされる「ダイエットをしてある」や「準備運動をしてある」などの場合、「ダイエットしてある」、「準備運動してある」という自動詞と考えれば、(25)の例と同様である。すなわち、動作主=対象であることに視点を置いて表現していると解釈できる。
- (7) 筆者の考えでは、現代日本語の静的相は不完結相（シツツアル）と結果相とに分岐する（副島1998）。

参考文献

- 金田一春彦（編）（1976）『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房
- 工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテキスト——現代日本語の時間の表現——』ひつじ書房
- Маслов, Юрий С. (1984) 'Об основанных понятиях аспектологий.' 菅野裕臣（訳）（1991）「アスペクト論の基本概念について」『動詞アスペクトについて(II)・学習院大学東洋文化研究所調査研究報告35』, 98-139
- 益岡隆志（1987）『命題の文法——日本語文法序説——』くろしお出版
- _____（2000）『日本語文法の諸相』くろしお出版
- 三上章（1953）『現代語法序説——シンタクスの試み——』刀江書院. 復刊. 1972. くろしお出版
- 森田良行（1971）「『本が置いてある』と『本を置いてある』」『講座正しい日本語第5巻文法編』明治書院, 174-188
- _____（1977）『基礎日本語』角川書店
- Nedjalkov, Vladimir P. (ed.) (1988) *Typology of resultative constructions*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- 奥田靖雄（1978）「アスペクトの研究をめぐって」『ことばの研究・序説』むぎ書房, 105-143
- 城田俊（1998）『日本語形態論』ひつじ書房
- 副島健作（1998）「現代日本語の不完結相——シツツアルの意味記述——」『日本語科学』4: 国立国語研究所, 31-52
- 高橋太郎（1969）「すがたともくろみ」金田一春彦（編）（1976）『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房, 117-153

- _____ (1985) 『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』 秀英出版
寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』 くろしお出版
渡辺義夫 (1969) 「『～している』との関連における『～してある』」 『福島大学教育学部論集』 21号-2, 55-63

用例出典

(砂女) 安部公房『砂の女』 / (女社) 赤川次郎『女社長に乾杯!』 / (人失) 太宰治『人間失格』 / (ダン) 村上春樹『ダンス・ダンス・ダンス』 / (錦繡) 宮本輝『錦繡』 / (歳月) 司馬遼太郎『歳月』 / (佐賀) 『佐賀新聞』

付 記

本稿は日本語文法学会第3回大会(2002年12月8日, 同志社女子大学今出川キャンパス)における同名の研究発表の草稿を一部修正したものである。

(琉球大学留学生センター)

On Relations between *Shite-aru* and *Suru / Shite-iru*

SOEJIMA, Kensaku

Keyword : object oriented, resultative, continuative, resultativity of change, perfect

Abstract

In this paper I argue that the *shite-aru* form has [+continuative, +resultative, +object oriented] and the *shite-iru* form has [+continuative, +resultative, -object oriented]. Namely, I define the *shite-aru* form as the objective resultative in Japanese from following 2 reasons.

- (1) In actual contexts, 'general meaning' of the *shite-aru* form, [+continuative, +resultative, +objective oriented], is realized as two specific meanings: the 'resultativity of change' and the 'perfect.' The later works in some definite act-oriented conditions as secondary meaning: (i) with apparent subject, (ii) with expressions of the point of time of actions and (iii) with expressions of quantity of actions. The former works as the primary meaning.
- (2) The 'perfect' meaning can not co-occur with subjectivity expressions: volitional form, imperative form, expressions of desire; passive form, expression of the giving and receiving of actions, etc. Then I conclude that the *shite-aru* form potentially has 'object oriented' in all situations.

(University of the Ryukyus)